保幼小連携・接続　～心の育ちについて語り合おう～

講師　大倉 得史（京都大学大学院教授）

１．３要領・指針の改訂・改定から

まずは、平成３０年度より適用された新幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を手がかりに話を始めたいと思います。今回の改訂・改定の目玉は、保育・幼児教育施設において『このようなことを育んでください』という「育みたい資質・能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下「１０の姿」という）が明示されたところでしょう。

「育みたい資質・能力」としては「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」と示されています。これらは同じ頃に改訂された小学校学習指導要領と対応しており、小学校学習指導要領では「基礎」が取れて「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力」「学びに向かう力、人間性等」と示されています。保育・幼児教育においては『その基礎を培ってください』ということです。今回の改訂・改定では、保幼小接続が意識されたつくりとなっています。

「１０の姿」には、『資質・能力が育まれているのはこのような姿だよ』と示され、健全な元気な前向きな子どもの姿が具体的に描かれていることが見て取れると思います。保育・幼児教育は、ただ遊んでいるだけ、子どものお世話をしているだけではなく、このような姿を目指して自覚的に工夫しながら行われているのだと明示したところは評価されるところです。

このような肯定的な側面もありますが、注意しなければならないことがあります。第一に「１０の姿」に描かれたものは結果だということです。質の高い、工夫された保育・教育実践の末に、ある日ふと気付くと実現されているような結果であって、リアルな子どもの姿がそのままで捉えられているものではありません。

「１０の姿」が実現されていく過程は、子ども一人ひとりによって異なり、そこに至るまでは様々な姿があることでしょう。この「１０の姿」が望ましいものとして明示されたとして、どういった関わりをして、いかにして実現されていくかは、保育者・教育者が常に考えておかなければならない研究課題だと思います。

更に「１０の姿」についてもう一つ注意したいことは、『様々な姿の背後には、必ず思いの領域がある』ということです。例えば「協調性」について言えば、皆と一緒に協調し集団活動ができている子どもの姿は、大人の目から見れば微笑ましいことは確かでしょう。しかし、注意して考えると『その子自身が心から楽しみ自己発揮しながら参加しているのか』『集団の動きに流されて何となくついていっているのか』『先生から怒られるので仕方なく合わせているのか』、同じように『皆と一緒に協調し集団行動ができている』背後に、子ども一人ひとりの様々な思いがあることに気付きます。子どもを育てていくうえで特に重要なのは、子どもの心の動き、心のあり様であり、それが充実し生き生きしたものになるように働きかけていくことが保育の基本だと思います。つまり『質の高い、工夫された保育・教育実践の末に』と述べたのは、『子どもの心を育てることを目標に保育・教育を行っていると、ある日ふと自然と、子どもの内側からその子なりの主体性のベクトルが伸びてくる、その結果なんだ』ということであり、これは「１０の姿」を考えるうえで非常に重要なポイントになると思います。

２　主体性とは

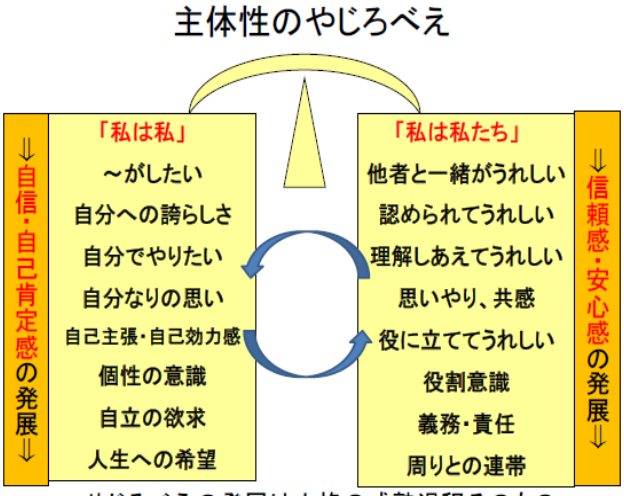
主体性とは、その人の内側から自然と沸き起こってくる『～をしたい』『～をしよう』という前向きな気持ちの動きです。その思いには２つのパターンがあります。

１つは、他の誰とも違う私として『自分の思いを持って自分らしく生きたい』というもので、『自分はこうしたい』という思いを明確に作り出し、意欲的に取り組もうとする心の動きです。その思いの根底には『自分はありのままの自分でいい』という自信や自己肯定感があります。このような心を主体性の「私は私」の側面と呼んでいます。

もう１つは、『周囲の人と共に生きたい』というものです。人は他の人と気持ちが繋がれることを嬉しいと思い、気持ちが和み、ハッピーになり、心が温かくなります。そのことが気持ち良いので、自然と他者を思いやろうとする心の動きが出てきます。その思いの根底には『他者は自分に悪いようにしない』『気持ちをきっと分かってくれる』という信頼感や安心感があります。このような心を主体性の「私は私たち」の側面と呼んでいます。

人は「私は私」として生きたい、けれどもそれだけでは生きていけず、「私は私たち」としても生きていたいという思いがあります。これは人間が大昔から群れをなして生きてきた生き物だからです。例えば同じように群れをなして生きている動物において、他の個体が敵に襲われているときに、自分の身が危なくても、我が身を顧みずに助けにいく行動がしばしば見られます。おそらく人間もそうでしょう。個としても生きたいが、「私たち」という類としても充実を目指したい。これはおそらく遺伝子レベルで、何百年も前から根源的にインプットされている人間の欲求だと思います。人間にとってどちらもが大切な欲求であり、この両面に折合いをつけながら生き生きと生活している心のあり様、これを主体性と呼ぼうということです。

主体性を右図のようにやじろべえの形で表してみましょう。



赤ちゃんは『おっぱいが欲しい』『おしめが濡れた』と泣きます。これが『～がしたい』の出発点です。それに養育者や保育者が丁寧に応えていると、やがて赤ちゃんはお腹がすいていないときでも、おしめが濡れていないときでも、大好きな養育者や保育者がこちらを見てくれているだけで嬉しいという『他者と一緒が嬉しい』という気持ちが芽生えてきます。これが「私は私たち」の出発点です。１～３歳くらいになると、自分でできることが増えてきます。自分に誇らしさを感じ、他の誰とも異なる「私」という自我意識が芽生えてきて、自分なりの思いがしっかりとできてきます。そのような形で「私は私」が発展していきます。それと同時に一個の「私」ができると、あっちの「私」とこっちの「私」がぶつかったり衝突したりする場面が増えてきます。けれど、それらがふと理解し合えたとき、あるいは『あっちの「私」がハッピーな顔になったとき、自分もハッピーになる』、そんなときに思いやりや共感の心が芽生えてきます。幼児期後期になると、より言葉達者に自己主張を始め、『自分はこの分野であればそこそこできるぞ』という自己効力感が出てきます。小学生くらいになると『自分はこのクラス集団の中でどのようなキャラなのだろう』という個性の意識を持つようになります。そうした自分なりの持ち味を生かしながら『周りの人たちの役に立てて嬉しい』『この学級や学校の中でこんな役割を担えて嬉しい』という意識へと発展して

いきます。青年期くらいになると、『大人からああだこうだと言われるのは嫌だ』『自分はこういった人生を歩んでいきたい』という自立の欲求や人生の希望が育ち、そのような生活を送っていくために、社会の中で義務や責任を果たしながら周りの人と協力しながら生活していこうします。このような形で「私は私」と「私は私たち」は常にセットとなり、絡まり合いながら徐々に豊かなものに、複雑なものに、高度なものに発展していきます。やじろべえの腕がぐっと伸びてくるわけです。

私たちの心は、『自分はこうしたい。けれどあの人の気持ちを考えるとそれはできない』というように「私は私」と「私は私たち」がしばしば葛藤し、絶えず揺れています。その葛藤に、その都度何とか折合いをつけながら生活をしていくというのが、成熟した人間のあり様だと思います。

やじろべえの腕がぐっと伸びて、複雑なものになっていく過程は、人格がどんどんと複雑になって、絶妙なバランスをとっていく、人格の成熟過程そのものだと言ってもいいと思います。「１０の姿」は、おそらくこの発展の過程の一部です。このやじろべえが発展してくると、「１０の姿」も自然と出てくるのだと思います。

このような考え方で物事を捉えると、『子どもの心に焦点を当てて、この主体性のやじろべえをいかに育んでいくか』が保育・教育、あらゆる子育てにおいて肝になるポイントであることが見えてきます。

３　エピソード記述・検討会とは

子どもの姿を記録して、それについて皆で検討し合うことは、これまでにもなされてきました。『もっと子どもの心のあり様や心の動きに対してより深く省察できるような記述や検討会の仕方はないだろうか』と生まれてきたのが、エピソード記述法です。単に子どもが『～した』『～できるようなった』ではなく、『ある場面で保育者・教師が何を思い、何を願って子どもに関わっていたか』『ある子どもの姿から、どんな思い、どんな気持ちの動きを感じとったか』『保育者・教師がそこにどのように心動かされ、それに対してどのように応じていったのか』、こういった気持ちと気持ちの交流や動きを描き出そうとしていくのがエピソード記述法です。従来の客観的に書かれた記録とは少し違い、主観的なものも交えながら『自分はこんなふうに感じたんだよ』ということも余さず書くという意味での客観性を目指します。主語は「私」です。その「私」で書き下していく文章を読んでいくと、読者もまたその「私」の位置に入り込んで、その場を追体験するような気持ちになります。また、子どもの気持ちを一緒に想像できたり、『自分だったらこういうふうに関わるな』と実践のシミュレーションができたりします。この記述法とこれに基づいた検討会が、保育・教育の中で子どもの心の育ちを捉えていくうえで重要で有効だと認識され、取組みが広がってきています。

エピソード記述に基づいて検討会をし合うということには、もう１ついいことがあります。

子どもを真ん中に置いて話し合うことで、三角形の構図になります。三角形の対話は、私とあなたという二者関係よりも緊張が少ないというのが特徴です。二者のやりとりは、濃密ではありますが、しばしばそこで怒りが沸いてきたり、自分はダメなんじゃないかと思ってしまったりするなど、大きく心が動かされ不安定になりやすい関係です。一方、三者関係は、二者の間に何かがあることで緊張が少なくなります。例えば、名刺交換や天気の話題などもそうです。柔らかく相手と共同意識を持つのに大変有効です。子どもを真ん中に置いて話し合うことで、子どもを育てるという同じ営みをしている者同士の仲間意識が育まれます。これは職種を越えても同様です。『自分は責められている』『自分のやり方がおかしいと言われてる』というような緊張を感じず、むしろ互いにどのようなことを大事に考えながら仕事をしているのかの相互理解をしていくことに繋がります。子ども理解、育てる営みについて深く考え、洞察を深めていくことができます。これを

定期的に職場研修や保幼小連携の取組として取り入れることで、個々人の実践力、チームとしてのまとまり、子育ての力量や質が向上していくと考えられます。

本日はエピソード検討会を体験していただき、保幼小連携のヒントにしていただければと思っています。

４　エピソード検討会の進め方

エピソード検討会において、私が大切にしているポイントをいくつか紹介します。

（１）検討会の目標、グランドルールを明示する

まず、目標とグランドルール（注意点）をしっかり共有しましょう。

目標は、これまで普段の保育・教育実践の中で見えなかった領域への想像を膨らませていくことです。

子どもがどのようなことを感じ、どのような体験をしているのだろう。家庭でどのような生活があり、園・校の姿とどのように繋がっているのだろう。その子のそれまでの生育史と今この場面で見られた姿とどのような関連があるのだろう。保育者・教育者がエピソードの中で対応したそのことに、どのような意味があり、子どもにどのような心的な影響を与えたのだろう。

想像でよいのです。子どもについての多角的で柔軟な見方があることが感じられてきます。そしてうまくいけば「そうか、こういう関わりがとても大切なのかもしれない」というように、心の育ち一般に関する洞察や自らの保育・教育観の深まり等ができていきます。こういったことを目的にしていくのがエピソード検討会です。

心構えとしては、積極的に参加・発言しましょう。他者の声も自分の声もよく聴きましょう。童心に帰って心身を開いて楽しみましょう。そして、一番大事なのは、正解がないということです。子どもの心の中は子どもに聞いてみなければ分かりません。子ども自身もうまく言葉にはできない心模様を体験しているかもしれません。正解がないので、皆で自由に想像を膨らませましょう。

（２）進め方

進め方としては、「読み上げ」「自由に意見交換」「まとめ」の順です。最後の「まとめ」は、あってもなくてもよいと思いますが、例えば講師やファシリテーターによる「まとめ」で終わるという方法もあります。

「１回で似たようなテーマのエピソードを２～３個取り上げる」あるいは「１時間で１人のエピソードをじっくり検討する」等、どのような形でもよいのですが、１つのエピソードに３０分以上は確保したいところです。

正解も不正解もないことをしっかり伝えることは大切です。『これを言ったら間違いかな』『恥ずかしいな』と思う必要はありません。検討会をすると、どうしてもベテランや上司の先生が若手を指導するような場として捉えられがちですが、評価のまなざしを向け、相手の足りないものを教え込む関わりをされると委縮してしまうのは、子どもも大人も同じだと思います。一方が教えて他方が教えられるという関係ではなく、皆が対等な立場に立ち、共に考え想像を膨らませていける関係で行うのがエピソード検討会です。子どもの心という目に見えないものへの想像を膨らませていく場であるということを、検討会の度に明示してから入るとよいと思います。

（３）ファシリテーターの重要性

上記のような枠組みを提示するファシリテーターが重要になってきます。

ア　安全で自由な場を保障する

検討会の場では何を言っても傷つくことがないこと、評価されたり、攻められたりすることがないことなど、自由で安全な場にすること。そして、場の枠組みを作り出して、これを支えること。これらがファシリテーターの役目です。

ファリシテーター―の態度がはっきりしないと方向性を見失い、参加者が不安になってしまいます。ここではだれも傷つかないことを保障するという明確な態度表明をし、柔らかく、毅然とした態度で、責任をもって運営することが大切です。

ただし、自由な意見交換の場を保障するところまでをリードするというものであり、それを越えて、評価、指導するリードではありません。ファシリテーターが教える構えになっては元も子もありません。園長や主任がファシリテーターをする際には、権威を積極的に脱ぎ捨てる工夫が大切になります。例えば「へえ、気づかなかったなぁ…」「不思議やなぁ…」等の言葉を差しはさむと、『自分も正解を知らないんだ』ということが印象付けられます。慣れてきたら、交代でファシリテーターを回していくのもよいでしょう。年齢や役職等の上下関係を脱色して、皆が対等である雰囲気を作っていくことがファシリテーターの重要な役目となります。

イ　場を仕切りすぎない

ファシリテーターが場を仕切りすぎないことも大切です。

「〇〇さんいかがですか」「次に□□さんいかがですか」といった司会進行をすると、参加者は自分の番が来て、当てられるまでは黙っておこうというモードになってしまいます。「自由に発言をどうぞ」という枠だけを作り、参加者の発言を待ちましょう。

ファシリテーターが口を開くときは、参加者と同等な立場から質問や話を膨らませるのがベターです。

ファシリテーターを務めていると、沈黙の時間があると落ち着かなくなり、誰かに振ってしまいたくなりがちです。そういったときにこそ慌てず、この沈黙の時間は参加者がエピソードを味わったり、考えたりするために必要な時間であると思って待ちましょう。たいていは、勇気のある人、考えがある人が発言をしてくれるものです。ここで耐えられなくなって「△△さんはどうですか」と振ってしまうと、「当てられて初めてしゃべる」構図が固まってしまうこともあります。

ウ　良い発言を膨らませる

発言が出るようなら、ファシリテーターも一緒に自由に想像や連想を膨らませても構いません。仕切り過ぎる発言はよくありませんが、ふと思いついたり、なるほどと思ったりしたことを一参加者として自由に発言することで場が活性化します。ファシリテーターだからと控えすぎると、言いたいことを我慢する空気が伝搬してしまい、周りの人も言いにくくなってしまいます。

特に誰かが「良い発言」をした際には、ファシリテーターが同意や話を膨らませることで、その発言を強調することが大切です。

それでは「良い発言」とはどのようなものでしょう。４点ほどあげてみます。

１つ、子どもの心のあり様、体験について、想像を膨らませてくれるような発言。

２つ、それまでなかった新たな視点、例えば、子どもの家庭背景や育ちの歴史など、重要な要素に目を向けさせてくれる発言。

３つ、保育者・教育者の対応がこういう心の育ちに繋がるのではないかという発言。

４つ、エピソードの書き手の良いところ、実践者の素敵なところに着目し、認める発言。

保育・教育の仕事は大変です。エピソード検討会をすることによってエンパワーメントされ、自分が元気になることが一番大切なことだと思います。

（４）行間を読む

書かれていることをヒントに、普段なかなか意識しない領域にまで想像の羽を広げていきましょう。

書き手が参加している場合は、「これはどうだったの？」と尋ねることも可能ですが、必ずしも参加しているとは限りません。書かれていることをヒントに、子どもの心のあり様、家庭背景、これまでの育ちの歴史などを想像し、肉付けしていくことで、登場人物の体験していることがリアルに思い描かれていきます。ある意味では、登場人物が生き生きとしてきます。

参加者一人ひとりがリアルな追体験ができるように、（書き手がいれば）書き手に必要な事柄

を尋ねたり、情報が足りない部分について皆で想像を出し合ったりして穴埋めしていく作業の場が検討会です。

この作業が高度なところまでいくと、エピソードに書かれていないことまで見通したようなコメントや行間を読むようなコメントが増えてきます。「これだけの情報から、よくそんなことまで分かるなぁ」というコメントが出てくることもあります。

レベルの高い参加者がいる検討会は本当に面白いです。それは、自分がこれまでに出会った子どもや体験した状況と似た何かを、わずかな情報から感じ取って発言されるからです。体験に基づいた発言のため、参加者がそれに触発され、体験レベルへと想像が掻き立てられていきます。

そのためには、ファシリテーターに高いレベルの読み方ができるようになることが求められます。けれども、それを早々に示して参加者に押し付けるのではなく、適切なタイミングで、参加者の想像がそれまでの議論よりも一歩広がるように、一つの刺激として発言することを心掛けてください。

エピソードの書き手は様々です。十分な情報が書ききれていないこともあるでしょう。「エピソードの不十分さ」を嘆くのではなく、読む方が『何が書かれていないのか』『実際にはこんなことがあったのではないか』といった想像力を鍛える力が重要になってくると思います。

５　検討会の実際

（１）エピソード検討会を見てみよう part１

こどもみらい館の研究プロジェクトでは、公私立の保育園（所）・幼稚園、小学校の先生方が一緒に実践事例を持ち寄り、エピソード検討をしてこられました。

幼稚園のＡ先生が書かれた「一緒にしよう」のエピソードを検討している場面の一部を見てみましょう。

エピソード記述「一緒にしよう」　　Ａ保育者

＜背景＞

まきちゃんは、３歳児の女児で両親と３人で暮らしている。父親の仕事の都合で４月に引っ越してきた。初めて集団生活を送ることになったまきちゃんは、母親に抱っこされて登園する。登園しても母親から離れられず、母親もまきちゃんを抱いたままでなかなか手放すことができない。昨夜のことや健康状態などを聞く時間をとることで、まきちゃんが泣いていても預かれるようになった。入園前は母親と家の中で過ごすことが多かったことを聞き、集団での経験を増やしていきたいと思った。

保育室では、先に登園してきた子どもたちが思い思いに遊んでいる。その様子を見ただけでまきちゃんは泣いてしまう。私（担任）の服をぐっとつかみ一日中その状態で過ごす。私が保育室から出るときは、代わりの保育者の服を離さないということも続いた。母親がまきちゃんの体調が気がかりとの理由で欠席が多く、夏が過ぎてもこのような状態だった。

＜エピソード＞

９月のある日、他の子どもがビーズのひも通しをしている遊びに興味を示したが、近づくことができない。私が「まきちゃん、ビーズしたい？」と聞くと、まきちゃんは「したい」と答えてくれたが、笑顔はなく足は動かない。最近では短い言葉で思いを伝えられるようになってきた。私がそばにいれば泣くことは減り、服をつかんだまま子どもたちが遊んでいる様子を見ることも増えた。うまく友だちの遊びの中に入ることができればと思っていたので「先生と一緒にしようか」と手を出して誘うとまきちゃんは「うん」と答えて歩きだした。まきちゃんにとっては、子どもの輪に入るのもビーズ通しも初めてだった。私はまきちゃんの隣に座り「こうするんだよ」と一つビーズを通し渡した。まきちゃんは、ビーズを一つ手に取ってひもに通すと顔を上げて、はにかんだように微笑んだ。その後は他の子どもがしているのを見ながら、嬉しそうに色々なビーズを通していた。

動画「明日に生かすエピソード検討会にしよう」
一部抜粋視聴

保育所のＢ先生がファシリテーターをされ、先述した検討会のポイントを踏まえて、「正解や間違いはありませんので、どなたからでもどうぞ」と切り出されました。

最初に保育園のＣ先生が、このエピソードに至る４月から９月までの時間の中で、Ａ先生がずっとまきちゃんに寄り添い、好きなものを用意したり、心の動きに気付けるようにしてこられたりしてきたことで、『したい』という気持ちに気付けたというのが一番のポイントであろうという議論を方向付ける的確な発言をされました。

次に幼稚園のＤ先生が、「入園してきたときの気持ちを考えただけで胸が痛くなる」と、まきちゃんの不安な心持ちがありありと浮かんでくるような、子どもの身になって感じる発言をされました。子どもの体験世界に参加者の想像の羽を膨らませてくれる発言です。

次に小学校のＥ先生が、同じようにまきちゃんの心持ちが感じられる発言をされた後に、「先生がいてくれてよかった。安心できることでもあったのではないか」とＡ先生が安全基地となっていたこと、安全基地があるからこそ、新しい試みにもチャレンジしていけるのではないかと指摘されました。

ファシリテーターをしていたＢ先生が自分の思いついたこととして、「これは危ない橋だったのではないか」という読み取りを語られました。「ここで引っ張って『やらない』となってしまえばまた萎縮してしまうかもしれない。また、ここにくるまでには母親との関係の積み重ねがあったのではないか」とエピソードには書かれていないところまで想像を膨らませて発言をされていました。子どもの姿は園と家庭とで繋がっています。また、保護者が保育者に信頼感を持てるようになると、子どもも保育者に対して信頼感を持てるようになります。全てがリンクしている、このように考えていくことは非常に重要なポイントです。「Ａ先生はこういう日がきっとくるのではないかと準備をしてきたでしょうし、今日は勝負できるかもしれないと思ったのかもしれない。エピソードにその辺りが書かれているともっとおもしろかった」という発言もありました。「雰囲気を察知し、まきちゃんの心を読み取る、その力が素晴らしい」という発言もあり、実践を認めるという意味でも大切な発言でした。

Ａ先生が「ついつい言葉で話しかけてしまうのだが、いろんなものから感じたり察知したりすることの大切さをまきちゃんのケースから園の皆が気付かされた」と発言されました。

最後にＣ先生が、「ついつい目に見える姿で評価してしまいがちだが、子どもがどう思っているかということを想像する力や感受性が試されている。しなければならない、こうでなくてはならないといった場になれば、その子の行き場はなくなってしまう」と重要な指摘をされました。

（２）エピソード検討会をやってみよう part１

先ほどのエピソードの続きを、グループで検討してみましょう。

「一緒にしよう」つづき

＜背景＞

４歳児になって、室内では保育者から離れても友だちと遊べるようになったが、園庭では私のそばにいることが多く、砂場やブランコに行くときは「一緒にしよう」と私の手を引くまきちゃんだった。

子どもたちが思い思いの遊びを楽しんでいたある日、まきちゃんはクラスの友だちと園庭に出てきたが、私がいないことに気付きその場に止まってしまった。私が遅れて出ていくと、走ってきて黙って手をつないできた。まきちゃんがこわばった表情をしていたので私は “不安だったんだろうな”と思った。そして、いつものように「（ブランコを）一緒にしよう」と言ってくるかなと思いながら、手をつないでブランコの方に歩いていった。

＜エピソード＞

年下の子どもが、平均台に上ってみたものの慣れない様子で一歩、二歩とふらつきこわごわ進んでいた。私はまきちゃんの手をつないで平均台へと向かった。平均台のそばに来るとそっと手を放し、年下の子どもに手を差し出した。その子は私の手を持つことで、ゆっくりと渡りきることが

できた。私は手をたたきながら、その子とまきちゃんに「やった。すごいね」と声をかけた。渡り切った子どもは緊張した顔から笑顔となった。じっと見ていたまきちゃんの顔もパッと明るくなった。他の子どもが『頑張ってできたこと』を一緒に喜んでくれているまきちゃんが愛おしくなった。

平均台のスタートのところに、他の子どもたちが待っていた。私は“今ならまきちゃんが他の子どもに関われるかもしれない”と思い「まきちゃん、先生みたいに、小さい友だちのお手伝いしてくれるかな」と話しかけた。まきちゃんはうなずき、待っている子どものところに走っていき手を差し出した。平均台を歩く子からも、手をつなぐまきちゃんからも一生懸命が伝わってきた。平均台を渡りきるまでの少しの間が、とても長い時間に思えた。まきちゃんが自分から友だちに関わりをもてたことが嬉しかった。「『やったー、すごいね』って一緒に喜んだらいいんだよ」と伝えると「うん」と力強く返事をして笑顔を見せた。その場にいるみんなで手をたたいて喜び合った。

【エピソード検討発表①】

キーワードとしては、「安心感」という言葉が出ました。

安心感というのは、担任とまきちゃんとの間だけではなく、職員全体の関わりもまきちゃんの安心感に繋がっただろうし、母親の安心がまきちゃん自身の安心にも繋がったのだろう。安心できる大人、安心できる園について話し合いました。

【大倉先生コメント】

この園全体が、安心感のある場だったのではないかということですね。他の先生方のまきちゃんへの関わり、園の先生方の他の子どもへの関わり、保護者と先生との関係などが安心できるものであったのでしょう。様々なことが重なり合い、安心の場に浸されて、まきちゃんが他の友達にちょっと手を差し伸べてみるような姿が自然に出てきたのかもしれません。おっかなびっくりで平均台を渡っていく友達を支えるという体験は、実は、自分を支える体験でもあり、まきちゃんは自分自身にも手を差し伸べているわけです。そういうことができるようになっているということは、心の育ちを感じさせてくれる部分だと思います。

【エピソード検討発表②】

まきちゃんは先生と一緒に過ごしてきたことで、先生の姿がモデルになっていたのではないかと話し合いました。自分がしてもらっていたことや先生が友達にしていることを常に側で見ていたことから、『こんな時にはこうしたらいいんだな』ということを感じられ、それも安心感に繋がったのではないかと思います。

「安心貯金が貯まった」という表現がでました。とてもいい言葉だと感じました。最初は不安だったけれど、少しずつ周りの先生方の支えや自分の頑張りで安心貯金が貯まり、「手を差し伸べる」という姿として出てきたのだろう。同じクラスの友達よりも遠い存在の子どもとの関わりができてきているということは、安心感がいっぱい貯まってきたのだろうという意見が出ました。

【大倉先生コメント】

「安心貯金」、いい言葉ですね。養護的な関わりの中、安心安全な感覚が高まると、自然と『あれもやってみたい』『これもやってみたい』という意欲が膨らんできます。そのようなときに、今回のように先生のモデルや提示がうまくはまると、子ども側から『あんなふうにやってみたい』という気持ちが動き、自然に手を差し伸べられるようなことが出てくるのだと思います。

（３）エピソード検討会を見てみよう part２

エピソード記述「ビー玉ぬすんじゃいました」　Ｆ教諭

＜背景＞

４年生のかいくん。家族は父と母、兄（中１）の４人家族。両親は共働きで忙しく、かいくんが学校から帰ると近所に住む祖母が面倒をみてくれていた。かいくんは、体育の新しい遊びなど初めてすることは、失敗するかもしれないという恐れから、最初から「やらへん」と逃げてしまうことが多かった。また、自分の思いを上手に言葉にすることも苦手で、言葉が足りず友だちとケンカになってしまったり、思いをうまく伝えられずに嫌な言葉で友だちを攻撃してしまったりすることも多くあった。

＜エピソード＞

１学期、友だちとのトラブルが多く、かいくんが友だちに手を出してしまったり、言葉で攻撃してしまったりすることが何度も続いていた。授業中の態度も悪く、床に寝転んでみたり机に突っ伏して話を聞かなかったりすることも多かった。クラスメートのまさやくんとはそりが合わないこともあり、口喧嘩をよくしていた。その都度、個別にどんな思いでしてしまったのか、どうしたらよかったかなどを話してきた。しかし、私（担任）が一方的に話をし、かいくんはうつむいたまま何も話さないということが多かった。私は話をするときには必ず、かいくんのことを大事に思っているということを伝えながら、あかんことはあかんと伝えるようにしていた。私は、友だちになかなか謝れないでいるかいくんのことを“自分が悪かったことはわかっているように思うのだが、これからどう関わっていけばいいだろう”と悩んでいた。

動画「ビー玉ぬすんじゃいました」一部抜粋視聴

（４）エピソード検討会をやってみよう part２

「ビー玉ぬすんじゃいました」つづき

＜背景＞

２学期が始まってすぐ、宿泊学習があった。かいくんは、火おこしとレクリエーションの係をすると立候補した。“自分の役の仕事を最後まで務められるかな”と不安なところもあったが“一つのことをやり遂げることで、自信がついたらいいな”と願い“見守りながらそっとサポートしていこう”と思った。わからなくて困ったということのないようにスモールステップで教えたり、班のみんなと協力できるように支援したりしたことで、自分の係を最後までやり遂げることができた。今まで途中で投げ出してしまったり、苦手なことやできるかわからないことから逃げてしまったりすることの多かったかいくんが、最後まで自分の係の仕事をやり遂げられたことは彼にとって大きな成長だと思う。私はとても嬉しかった。

＜エピソード＞

ある日、教室の教師机に一枚のノートの端切れが入っていた。開いてみると「ごめんなさい ビー玉ぬすんじゃいました。かえします。かい」と書かれていた。私の知らないうちに机の中からビー玉をとって遊んでいたようだ。物をとることは決して良いことではないが、とったことを認め、素直に謝ってきたことがとてもかわいらしく思え、少しずつ心を開いてきてくれていることが嬉しかった。その後、下校時に声をかけ「とったことはあかんかったけど、ごめんねって言ってくれて、本当のことを伝えてくれて嬉しかったよ」と話した。

【エピソード検討発表③】

先生がかいくんを大事に思っていることがとても伝わってきました。丁寧に関わってこられたことで、直接言うのは恥ずかしいけれど、手紙で謝ろうという気持ちに繋がったのではないかという話が出ました。

そして、幼児期にはどのような子どもだったのだろう、どのような体験をしていたのだろうという話もしました。自園にも言葉で伝えることが苦手な子どもがおり、思いが伝わるように保育者が仲介に入るのだが、本人の中ではすっきりしないことも残っているのかもしれないとの発言から、かいくんの経験の中にもそういったことの積み重ねがあり、言っても仕方がないという諦めに繋がってしまったのかもしれないと想像し合いました。そのような子どもがいる園の先生は、保護者の方に家庭でゆっくり聞いてあげて欲しいことを伝え、家庭も巻き込んで、その子の思いが存分に出せるようにしていると話されました。また、頑張れたという経験も少なかったのではないかという話も出ました。

かいくんが自分なりに考えた結果、大事な先生に謝りたいと思い、手紙を書いたということがとても素敵だということと、ビー玉をどんな思いで取ったのだろうという話にもなりました。本当は欲しかったのではなく、先生の気を引きたい気持ちもあったのではないかという意見もありました。

【大倉先生コメント】

ビー玉を取った心理はどのようなものだったのでしょう。『いたずらしてやれ』と思ったのか、それとも『大好きな先生のビー玉だから、自分の

手元に置きたくなった』ということもありそうです。エピソードから皆さんが感じ取られた通り、先生がかいくんをかわいいと思っておられること、かいくんもこの先生ならと信頼を寄せてきたことなどが、行間から滲み出ているように思います。そういうことがあっての、心温まる、何とも言えないかわいらしい手紙です。こういった先生との心の交流が、子どもの一番根本にある自信や安心感に繋がっていきます。大切にしていきたいものが強く感じられるエピソードです。

また、『幼児期以来、この子はどのような体験をしてきたのだろう』『言葉で自分の思いを伝えたりやり遂げたりするということが少ない子どもだったのだろうか。それが積もり積もってこういった姿に出てきているのだろうか』など、歴史的に見るという視点はとても大切です。その辺りまで話を膨らませていただいたのは、とても良かったと思います。

６　まとめ

保幼小の先生方で語り合ってきた中で、見えてきたことをまとめてみます。

心の育ちや主体性については、各自が漠としたイメージは持っています。ただし、それらは言語化することが非常に難しく、しばしば言葉の使い方がずれ、誤解が生じたりします。

つい目に見える行動・能力の発展に目を奪われ、大人はそこで評価をしてしまいがちです。その背後で子どもがどのような体験をし、どのように気持ちを動かしているのかといった想像がおろそかになってしまいます。

自由遊びを中心とした保育・幼児教育と、教科学習が大部分を占める学校教育の「差異」にのみ目が向いてしまう。園はこういうところ、小学校はこういうところと切り分けるような発想になってしまいがちです。

具体的なエピソードを出し合い、心の育ちとは何かを考え、どのように繋がっていくのかについて皆で考えていくと、そこに共通言語が生まれ、一定のビジョンも出てくると思います。

保育期・学校教育期それぞれの場に応じて、いかに「私は私」と「私は私たち」を育んでいけるかが重要になります。アイディアを出し合い共に考え、共有していくことが大切なところでしょう。

エピソード検討を重ねれば重ねるほど感じられるところですが、心の育ちは、皆が一律に達成する学習目標、達成目標ではなく、いつも個別具体的で、ユニークな形で発展していきます。主体性のやじろべえの基本的な骨組みをお示ししました。けれど、その人なりに、どのような『したい』『こう思う』が形作られるのか、その表現の仕方や、どのような形で人と繋がれるかは千差万別です。子ども一人ひとりの個性や周囲との関係性、育ちの歴史が複雑に絡み合って、一人の個性的な人となりができてくると思います。ですから、子どもの心が育っていくルートは常にユニークなものです。そのユニークな唯一無二さを大事にしながら、その子にあった心の育ちを支えていく。そのためにどうしていったらよいのかを考えていく必要性があると思います。

『ああ、この子ここで変わった』『ここで気持ちが動いた』と思える瞬間に、心の育ちに関連した何かが起こっています。保育者・教育者として大切なことは、まずはその瞬間を感じられるようになること、ここが貴重だと気付けること、そうしたことが起こりやすいほっこりとした、温かく、互いに元気になれるような瞬間を生み出すような自覚的な工夫をしていくことです。それが主体としての心を育てる保育・教育実践の質の向上に繋がるのではないかと思います。

使用資料

【エピソード】こどもみらい館「私たちが大切にしたい心の育ちとは～語り合いから始めよう～」より

【動　　画】こどもみらい館「研修ＤＶＤ」より

- 令和３年度共同機構研修「明日に生かすエピソード検討会にしよう」
- 第５期研究プロジェクト「ビー玉ぬすんじゃいました」

令和４年度第５回共同機構研修会
令和４年８月４日／ＺＯＯＭ開催